

パンダイメージの構築をめぐる分析

—冷戦時期の日中パンダ外交の歴史と報道を通して—

ZHAO YIDUO

戦前の国民党政権から、戦後の共産党政権まで、中国のどの与党もパンダの重要性を常に意識している。そのため、1950年代から、中国は他国とのパンダ外交を積極的に展開し、動物外交を通じて自国のソフトパワーを形成することを目指してきた。これまで、多くの人にとってパンダに対するイメージはよく感性的認知に基づいており、パンダへの愛情がどこから来たのかわからない。多くの先行研究はパンダが過去数十年間で中国の文化的シンボルになったことを指摘していたが、もっとその前に、共産党政権下のパンダ外交の初期において、パンダのイメージがどう形成されたのか、また、パンダのイメージの分析によって、中国と海外のメディアでパンダのイメージ構築には違いがあるのかについて、わからないところが多いと思われる。そのため、パンダについて歴史的資料および新聞の内容から分析することはその時期のパンダのイメージをもっと深く理解するのを助けることができると考えている。それで、本研究は歴史的資料と日中新聞の関連報道を通じ、冷戦時期の日中パンダ外交を中心にその時期におけるパンダのイメージの構築、特徴などについて分析を行う。

序章は先行研究、論文の意義、分析対象と方法について説明した。

第1章は冷戦時期パンダ外交の相手の選択に関する分析を行う。冷戦時期における東西対立の国際構造の下、イデオロギー的風向計としてのパンダは、中国のこの時期の政策と外交の行方を代表している。また、パンダ外交対象国の選択における転換は、その後のパンダイメージの構築に歴史的、政治的な基盤を提供していることも考えられる。

第2章では、日中パンダ外交が実現した前の日本における「パンダ・ブーム」とパンダのイメージを分析した。日本人のパンダ観は一定の変化を経て形成されていることがわかった。また、それも日中パンダ外交におけるパンダイメージの構築を研究することの大前提であると思われる。

第3章は内容分析と言説分析の方法を通じ、1972年から1992年までの日本の『朝日新聞』、『読売新聞』と中国の『人民日報』、『光明日報』におけるパンダのイメージ構築に関する分析を行う。

終章は、前章の分析結果をまとめ、研究中の課題を検討した。本研究はパンダ外交と新聞にあらわ

2021 年度立命館大学社会学研究科修士論文要旨

れたパンダイメージを明らかにした。しかし、パンダが社会・受け手にどう受容されたのかは明らかにできなかった。そのため、今後の研究でこの内容についての分析を期待している。